

115.3.29 月(日) 捕えろ 1622

3928 3,925P

紀下190' 6行

隋煬帝から授けられた書の紛失

日本国への帰還途中、百済国に逗留して

いたある日、隋煬帝から小野妹子に授けられた書が、突如、紛失した。

推古紀十六年(六〇八)六月条にこう記す

水ている。

愛に妹子臣、奏して曰さく、臣、参還る

時に、唐の帝、書を以て臣に授く。然るに百

實際は隋煬帝

済国を経過する日に、百済人、探りて掠み取る。

是を以て上ること得むとまうす。是に、群

臣、議りて曰はく、夫れ使たる人は死ると

雖も、旨を失はむ。是の使、何にを急りて、

大國の書を失ふや」といふ。云々

ここに

百済人探以掠取

百済人、探りて掠み取る

と記述されている。

しかし、探り、掠み取っていった者が百済

人を捕え何らかの方法で確認しない限り、百

こ

この頁3〜4行

3,926¹

済人^{らびと}にだと今^{いま}かる筈^{はず}がない^のである。

■なお、この一節^{いっせつ}について

「妹子^{いもこ}が煬帝^{ようたい}の返書^{へんしよ}の内容^{ないよう}をはばかり、途^と

中^{ちゆう}奪^{うば}われた^はこと^にした^し

とリウ説^{せう}が提示^{ていし}されている。(日本書紀^{しよほんしよき}下^{した}日本古典^{しよほんこてん}

文学大系、岩波書店、一九〇頁注一一参照)

■それにしても日本の正史^{せいし}たる書物^{しよぶつ}に^に「注釈^{ちゆしやく}も示さず」公然^{こうぜん}と

「百済人^{ひやくせいじん}、探りて採^かみ取る^{とる}」

と記^きされており、穩当^{おんとう}でない、隣国^{りんこく}百済国^{ひやくせいこく}に對^{たい}

て失礼^{しつれい}であり、無神^{むしん}益^{えき}すぎる^といえよう。

■露骨^{ろこつ}なる表現^{ひょうげん}からいって、もしかしたら、明確^{めいめく}

に百済人^{ひやくせいじん}と記^きされているものの、――

実は、百済国^{ひやくせいこく}の人^{ひと}とリウ意味^{いみ}で^はなく

百済国^{ひやくせいこく}に居た^い人^{ひと}、つまり百済国^{ひやくせいこく}の小野妹子^{おののいもこ}

または百済国^{ひやくせいこく}の小野妹子^{おののいもこ}の胸中^{きゆうちゆう}の思^{おも}いを知^しっていた

人^{ひと}とリウ意味^{いみ}で記述^{きじゆつ}されているのかも知^しれない

ともあれ、

△小野妹子^{おののいもこ}は、百済国^{ひやくせいこく}を經過^{けいご}する日^ひに書^かを奪^{うば}

われた^はとリウこと^にした^し

のであろう。

*

名うい 相 1281 3904P 6所へ

その後で高句麗人の兵をよそなくせむ
天々改行

3,927P

ワい 携行 673
監視 491

けい 敬重 710 国書 776
文書 2207 文書中の語句

ほか 保管 2029

リ 探み取ったということになった

しかし、隋煬帝が小野妹子に授けた書は無
 くなつてしまつたにせよ、隋煬帝が裴
 世清に託したであろう国書は、裴世清の手
 とにあり、敬重に監視され、注意深く携行さ
 れていつたと思われる。
 また仮りに裴世清の手中にある国書には、推古
 紀十六年八月十二日条に見られるような儀礼的な文言
 いか記されていなかったとしても、――
 裴世清は、隋書倭国伝（末尾参照）を帯びていたたう
 うから、いずれその要件につけて切り出すに
 相違ない。うゝと推察される。
 とすれば、小野妹子がいつわって「書をな
 くらした」と騒ぎ立てたことに、一体、どんな意
 味があつたのたうか。
 定かでないが、小野妹子の「紛失劇」につ
 いて、次のように推察してみたり。
 隋煬帝の書には、
 「聖徳太子の意に沿わないと思われる内容の語句」
 が、縋々書き綴られていた。それ知らぬ風を装い、
 探み取った小野妹子は、人誰かが書を採

3925 296 6所へ
命令 失

H533/161
① 3925P
紀F190
② 紀F137P

予めば
予めば

行キ

3.928P

ヤ「裴世清の生望はいかばかりであつたか」
裴世清の末座を創始的なものにしたい。

紀F189P

紛失

三〇

ハ書が紛失した」という風評は、それとな
く裴世清の耳にも入るように入れた。
物色され、書が消え失せたのであれば、恐
らく掠り取られてしまったのだらう。
裴世清は、当然その書の持つ重要性につ
て知っていたであらうから、激怒し、蘇因高
（小野妹子）を叱責したに違いない。
紛失してしまつたあとで、とやかく言つて
みたところではどうなるものでもないか
しかに裴世清は、あきらめきかず、蘇因高（小
野妹子）の重大な落度をも練がましく思つたことだらう。
あるいは、裴世清の不安をあまり先行きとなく予感さ
るゝ、この紛失騒動が演じられたのかも知れない。
一方、元々紛失した書の書はハ……し
人知れず、逸速く、日本国の聖徳太子のも
とに届けられたのではなからうか。
裴世清が大和国へ着く迄の間に、聖徳太子
は秘策を練られた、と推察される。
その後の推古十六年六月十五日、裴世清・小
野妹子らが難波津へと至つた日に、妹子臣は奏
上して言つた（以下、推古紀十六年系、日本書紀
（F）井上光貞、中央公論社、一三七七八頁参照）
私か帰国するとき、隋の帝は国書を私に

も、みせられた
電
実（まこと）やかな

な1 小林 39⁹
也 文部省の決定を待す
こと ④ 3925⁹ 井上 13⁹

お授けになりました。ところが、百濟国を通
るあいだに、百濟に居た人が探り取り取った
ので、奉ることかできません。
何も知らない群臣は、
「そもそも使となつた人は、たとえ死ぬめ
にあおうとも、その任務を果たさなければならぬ
や小さなのに、使者小野妹子は、どうして大國
の書を失うような過失をおかしたのだ」と
と協議し、妹子を流刑に処すべきだと主張した。
聖徳太子は、ここに、あえてさからわず、
「小野妹子が隋の帝から授けられた國書
を紛失したのであれば、我が日本國の天皇
の御意向をお伺いするのが筋であらう。急使
を送り、天皇の勅を仰ぐことにしたい」と
仰せられた。とてあつたらうか。
■時に天皇(推古天皇)は、勅し
「妹子は國書を失うという罪を犯したか、
輕々しく刑に処すべきではない。其の大國の
客等が聞いたなら、亦不良し」と
と言われ、赦して刑に処さなかつた。

予の持てた、
③3927 15
はいつ 元 紀F190
拝謁 1759 ⑤3928 6月15日 3,930
H.S. 4.2 ⑤⑥
12

はいつ 元 紀F190
所詮 1122 ③3928 6月15日 3,930
宮仕え 2134 ③3928 6月15日 3,930
はいつ 元 紀F190
赦免 1035
こと 「元」 ③3928 6月15日 3,930

すなわち、妹子を流刑にしようとした者達も
天皇の言葉には従わざるを得なかったと
解されるであろう。
他方、隋の使人裴世清等は、
「蘇因高が、流刑に処せられることになったもの
その後、勅によって赦免された」
と聞いた。そしてその勅に
「其の大国の客等が聞いたら、亦不良し
とあったという。
所詮、宮仕えの身である裴世清たちも、蘇
因高が勅によって赦されたの
「それもおそらく
と納得した」と推測される。
なお、予め述べると、難波津に至った天月
十五日から約二ヶ月後の八月十二日に、
へ裴世清らは、日本国の都（九州の小墾田
宮）の朝廷において、推古天皇に拝謁した。
ように見受けられる。（推古紀十六年八月十二
日条参照）
恐らく、丁度この頃（八月頃）、推古天皇
は勅して、

3933-3/19
3934 14
3936 15
3937 16
3938 17
3939 18
3940 19
3941 20
3942 21
3943 22
3944 23
3945 24
3946 25
3947 26
3948 27
3949 28
3950 29
3951 30
3952 31
3953 32
3954 33
3955 34
3956 35
3957 36
3958 37
3959 38
3960 39
3961 40
3962 41
3963 42
3964 43
3965 44
3966 45
3967 46
3968 47
3969 48
3970 49
3971 50
3972 51
3973 52
3974 53
3975 54
3976 55
3977 56
3978 57
3979 58
3980 59
3981 60
3982 61
3983 62
3984 63
3985 64
3986 65
3987 66
3988 67
3989 68
3990 69
3991 70
3992 71
3993 72
3994 73
3995 74
3996 75
3997 76
3998 77
3999 78
4000 79
4001 80
4002 81
4003 82
4004 83
4005 84
4006 85
4007 86
4008 87
4009 88
4010 89
4011 90
4012 91
4013 92
4014 93
4015 94
4016 95
4017 96
4018 97
4019 98
4020 99
4021 100
4022 101
4023 102
4024 103
4025 104
4026 105
4027 106
4028 107
4029 108
4030 109
4031 110
4032 111
4033 112
4034 113
4035 114
4036 115
4037 116
4038 117
4039 118
4040 119
4041 120
4042 121
4043 122
4044 123
4045 124
4046 125
4047 126
4048 127
4049 128
4050 129
4051 130
4052 131
4053 132
4054 133
4055 134
4056 135
4057 136
4058 137
4059 138
4060 139
4061 140
4062 141
4063 142
4064 143
4065 144
4066 145
4067 146
4068 147
4069 148
4070 149
4071 150
4072 151
4073 152
4074 153
4075 154
4076 155
4077 156
4078 157
4079 158
4080 159
4081 160
4082 161
4083 162
4084 163
4085 164
4086 165
4087 166
4088 167
4089 168
4090 169
4091 170
4092 171
4093 172
4094 173
4095 174
4096 175
4097 176
4098 177
4099 178
4100 179
4101 180
4102 181
4103 182
4104 183
4105 184
4106 185
4107 186
4108 187
4109 188
4110 189
4111 190
4112 191
4113 192
4114 193
4115 194
4116 195
4117 196
4118 197
4119 198
4120 199
4121 200
4122 201
4123 202
4124 203
4125 204
4126 205
4127 206
4128 207
4129 208
4130 209
4131 210
4132 211
4133 212
4134 213
4135 214
4136 215
4137 216
4138 217
4139 218
4140 219
4141 220
4142 221
4143 222
4144 223
4145 224
4146 225
4147 226
4148 227
4149 228
4150 229
4151 230
4152 231
4153 232
4154 233
4155 234
4156 235
4157 236
4158 237
4159 238
4160 239
4161 240
4162 241
4163 242
4164 243
4165 244
4166 245
4167 246
4168 247
4169 248
4170 249
4171 250
4172 251
4173 252
4174 253
4175 254
4176 255
4177 256
4178 257
4179 258
4180 259
4181 260
4182 261
4183 262
4184 263
4185 264
4186 265
4187 266
4188 267
4189 268
4190 269
4191 270
4192 271
4193 272
4194 273
4195 274
4196 275
4197 276
4198 277
4199 278
4200 279
4201 280
4202 281
4203 282
4204 283
4205 284
4206 285
4207 286
4208 287
4209 288
4210 289
4211 290
4212 291
4213 292
4214 293
4215 294
4216 295
4217 296
4218 297
4219 298
4220 299
4221 300
4222 301
4223 302
4224 303
4225 304
4226 305
4227 306
4228 307
4229 308
4230 309
4231 310
4232 311
4233 312
4234 313
4235 314
4236 315
4237 316
4238 317
4239 318
4240 319
4241 320
4242 321
4243 322
4244 323
4245 324
4246 325
4247 326
4248 327
4249 328
4250 329
4251 330
4252 331
4253 332
4254 333
4255 334
4256 335
4257 336
4258 337
4259 338
4260 339
4261 340
4262 341
4263 342
4264 343
4265 344
4266 345
4267 346
4268 347
4269 348
4270 349
4271 350
4272 351
4273 352
4274 353
4275 354
4276 355
4277 356
4278 357
4279 358
4280 359
4281 360
4282 361
4283 362
4284 363
4285 364
4286 365
4287 366
4288 367
4289 368
4290 369
4291 370
4292 371
4293 372
4294 373
4295 374
4296 375
4297 376
4298 377
4299 378
4300 379
4301 380
4302 381
4303 382
4304 383
4305 384
4306 385
4307 386
4308 387
4309 388
4310 389
4311 390
4312 391
4313 392
4314 393
4315 394
4316 395
4317 396
4318 397
4319 398
4320 399
4321 400
4322 401
4323 402
4324 403
4325 404
4326 405
4327 406
4328 407
4329 408
4330 409
4331 410
4332 411
4333 412
4334 413
4335 414
4336 415
4337 416
4338 417
4339 418
4340 419
4341 420
4342 421
4343 422
4344 423
4345 424
4346 425
4347 426
4348 427
4349 428
4350 429
4351 430
4352 431
4353 432
4354 433
4355 434
4356 435
4357 436
4358 437
4359 438
4360 439
4361 440
4362 441
4363 442
4364 443
4365 444
4366 445
4367 446
4368 447
4369 448
4370 449
4371 450
4372 451
4373 452
4374 453
4375 454
4376 455
4377 456
4378 457
4379 458
4380 459
4381 460
4382 461
4383 462
4384 463
4385 464
4386 465
4387 466
4388 467
4389 468
4390 469
4391 470
4392 471
4393 472
4394 473
4395 474
4396 475
4397 476
4398 477
4399 478
4400 479
4401 480
4402 481
4403 482
4404 483
4405 484
4406 485
4407 486
4408 487
4409 488
4410 489
4411 490
4412 491
4413 492
4414 493
4415 494
4416 495
4417 496
4418 497
4419 498
4420 499
4421 500
4422 501
4423 502
4424 503
4425 504
4426 505
4427 506
4428 507
4429 508
4430 509
4431 510
4432 511
4433 512
4434 513
4435 514
4436 515
4437 516
4438 517
4439 518
4440 519
4441 520
4442 521
4443 522
4444 523
4445 524
4446 525
4447 526
4448 527
4449 528
4450 529
4451 530
4452 531
4453 532
4454 533
4455 534
4456 535
4457 536
4458 537
4459 538
4460 539
4461 540
4462 541
4463 542
4464 543
4465 544
4466 545
4467 546
4468 547
4469 548
4470 549
4471 550
4472 551
4473 552
4474 553
4475 554
4476 555
4477 556
4478 557
4479 558
4480 559
4481 560
4482 561
4483 562
4484 563
4485 564
4486 565
4487 566
4488 567
4489 568
4490 569
4491 570
4492 571
4493 572
4494 573
4495 574
4496 575
4497 576
4498 577
4499 578
4500 579
4501 580
4502 581
4503 582
4504 583
4505 584
4506 585
4507 586
4508 587
4509 588
4510 589
4511 590
4512 591
4513 592
4514 593
4515 594
4516 595
4517 596
4518 597
4519 598
4520 599
4521 600
4522 601
4523 602
4524 603
4525 604
4526 605
4527 606
4528 607
4529 608
4530 609
4531 610
4532 611
4533 612
4534 613
4535 614
4536 615
4537 616
4538 617
4539 618
4540 619
4541 620
4542 621
4543 622
4544 623
4545 624
4546 625
4547 626
4548 627
4549 628
4550 629
4551 630
4552 631
4553 632
4554 633
4555 634
4556 635
4557 636
4558 637
4559 638
4560 639
4561 640
4562 641
4563 642
4564 643
4565 644
4566 645
4567 646
4568 647
4569 648
4570 649
4571 650
4572 651
4573 652
4574 653
4575 654
4576 655
4577 656
4578 657
4579 658
4580 659
4581 660
4582 661
4583 662
4584 663
4585 664
4586 665
4587 666
4588 667
4589 668
4590 669
4591 670
4592 671
4593 672
4594 673
4595 674
4596 675
4597 676
4598 677
4599 678
4600 679
4601 680
4602 681
4603 682
4604 683
4605 684
4606 685
4607 686
4608 687
4609 688
4610 689
4611 690
4612 691
4613 692
4614 693
4615 694
4616 695
4617 696
4618 697
4619 698
4620 699
4621 700
4622 701
4623 702
4624 703
4625 704
4626 705
4627 706
4628 707
4629 708
4630 709
4631 710
4632 711
4633 712
4634 713
4635 714
4636 715
4637 716
4638 717
4639 718
4640 719
4641 720
4642 721
4643 722
4644 723
4645 724
4646 725
4647 726
4648 727
4649 728
4650 729
4651 730
4652 731
4653 732
4654 733
4655 734
4656 735
4657 736
4658 737
4659 738
4660 739
4661 740
4662 741
4663 742
4664 743
4665 744
4666 745
4667 746
4668 747
4669 748
4670 749
4671 750
4672 751
4673 752
4674 753
4675 754
4676 755
4677 756
4678 757
4679 758
4680 759
4681 760
4682 761
4683 762
4684 763
4685 764
4686 765
4687 766
4688 767
4689 768
4690 769
4691 770
4692 771
4693 772
4694 773
4695 774
4696 775
4697 776
4698 777
4699 778
4700 779
4701 780
4702 781
4703 782
4704 783
4705 784
4706 785
4707 786
4708 787
4709 788
4710 789
4711 790
4712 791
4713 792
4714 793
4715 794
4716 795
4717 796
4718 797
4719 798
4720 799
4721 800
4722 801
4723 802
4724 803
4725 804
4726 805
4727 806
4728 807
4729 808
4730 809
4731 810
4732 811
4733 812
4734 813
4735 814
4736 815
4737 816
4738 817
4739 818
4740 819
4741 820
4742 821
4743 822
4744 823
4745 824
4746 825
4747 826
4748 827
4749 828
4750 829
4751 830
4752 831
4753 832
4754 833
4755 834
4756 835
4757 836
4758 837
4759 838
4760 839
4761 840
4762 841
4763 842
4764 843
4765 844
4766 845
4767 846
4768 847
4769 848
4770 849
4771 850
4772 851
4773 852
4774 853
4775 854
4776 855
4777 856
4778 857
4779 858
4780 859
4781 860
4782 861
4783 862
4784 863
4785 864
4786 865
4787 866
4788 867
4789 868
4790 869
4791 870
4792 871
4793 872
4794 873
4795 874
4796 875
4797 876
4798 877
4799 878
4800 879
4801 880
4802 881
4803 882
4804 883
4805 884
4806 885
4807 886
4808 887
4809 888
4810 889
4811 890
4812 891
4813 892
4814 893
4815 894
4816 895
4817 896
4818 897
4819 898
4820 899
4821 900
4822 901
4823 902
4824 903
4825 904
4826 905
4827 906
4828 907
4829 908
4830 909
4831 910
4832 911
4833 912
4834 913
4835 914
4836 915
4837 916
4838 917
4839 918
4840 919
4841 920
4842 921
4843 922
4844 923
4845 924
4846 925
4847 926
4848 927
4849 928
4850 929
4851 930
4852 931
4853 932
4854 933
4855 934
4856 935
4857 936
4858 937
4859 938
4860 939
4861 940
4862 941
4863 942
4864 943
4865 944
4866 945
4867 946
4868 947
4869 948
4870 949
4871 950
4872 951
4873 952
4874 953
4875 954
4876 955
4877 956
4878 957
4879 958
4880 959
4881 960
4882 961
4883 962
4884 963
4885 964
4886 965
4887 966
4888 967
4889 968
4890 969
4891 970
4892 971
4893 972
4894 973
4895 974
4896 975
4897 976
4898 977
4899 978
4900 979
4901 980
4902 981
4903 982
4904 983
4905 984
4906 985
4907 986
4908 987
4909 988
4910 989
4911 990
4912 991
4913 992
4914 993
4915 994
4916 995
4917 996
4918 997
4919 998
4920 999
4921 1000
4922 1001
4923 1002
4924 1003
4925 1004
4926 1005
4927 1006
4928 1007
4929 1008
4930 1009
4931 1010
4932 1011
4933 1012
4934 1013
4935 1014
4936 1015
4937 1016
4938 1017
4939 1018
4940 1019
4941 1020
4942 1021
4943 1022
4944 1023
4945 1024
4946 1025
4947 1026
4948 1027
4949 1028
4950 1029
4951 1030
4952 1031
4953 1032
4954 1033
4955 1034
4956 1035
4957 1036
4958 1037
4959 1038
4960 1039
4961 1040
4962 1041
4963 1042
4964 1043
4965 1044
4966 1045
4967 1046
4968 1047
4969 1048
4970 1049
4971 1050
4972 1051
4973 1052
4974 1053
4975 1054
4976 1055
4977 1056
4978 1057
4979 1058
4980 1059
4981 1060
4982 1061
4983 1062
4984 1063
4985 1064
4986 1065
4987 1066
4988 1067
4989 1068
4990 1069
4991 1070
4992 1071
4993 1072
4994 1073
4995 1074
4996 1075
4997 1076
4998 1077
4999 1078
5000 1079
5001 1080
5002 1081
5003 1082
5004 1083
5005 1084
5006 1085
5007 1086
5008 1087
5009 1088
5010 1089
5011 1090
5012 1091
5013 1092
5014 1093
5015 1094
5016 1095
5017 1096
5018 1097
5019 1098
5020 1099
5021 1100
5022 1101
5023 1102
5024 1103
5025 1104
5026 1105
5027 1106
5028 1107
5029 1108
5030 1109
5031 1110
5032 1111
5033 1112
5034 1113
5035 1114
5036 1115
5037 1116
5038 1117
5039 1118
5040 1119
5041 1120
5042 1121
5043 1122
5044 1123
5045 1124
5046 1125
5047 1126
5048 1127
5049 1128
5050 1129
5051 1130
5052 1131
5053 1132
5054 1133
5055 1134
5056 1135
5057 1136
5058 1137
5059 1138
5060 1139
5061 1140
5062 1141
5063 1142
5064 1143
5065 1144
5066 1145
5067 1146
5068 1147
5069 1148
5070 1149
5071 1150
5072 1151
5073 1152
5074 1153
5075 1154
5076 1155
5077 1156
5078 1157
5079 1158
5080 1159
5081 1160
5082 1161
5083 1162
5084 1163
5085 1164
5086 1165
5087 1166
5088 1167
5089 1168
5090 1169
5091 1170
5092 1171
5093 1172
5094 1173
5095 1174
5096 1175
5097 1176
5098 1177
5099 1178
5100 1179
5101 1180
5102 1181
5103 1182
5104 1183
5105 1184
5106 1185
5107 1186
5108 1187
5109 1188
5110 1189
5111 1190
5112 1191
5113 1192
5114 1193
5115 1194
5116 1195
5117 1196
5118 1197
5119 1198
5120 1199
5121 1200
5122 1201
5123 1202
5124 1203
5125 1204
5126 1205
5127 1206
5128 1207
5129 1208
5130 1209
5131 1210
5132 1211
5133 1212
5134 1213
5135 1214
5136 1215
5137 1216
5138 1217
5139 1218
5140 1219
5141 1220
5142 1221
5143 1222
5144 1223
5145 1224
5146 1225
5147 1226
5148 1227
5149 1228
5150 1229
5151 1230
5152 1231
5153 1232
5154 1233

木ト越 78

H54.3(土) 6

→ 3923 13人

大井口 3837-33

(こ)

3,932P

魏文 43P

通紙 後漢の蔡倫 → 前漢にうかの書という

魏文 45P

小林 805P

3939 1/2

3942

小井 41P

附庸 60P

附庸 17-21 四 41P

能^{あた}ゆ^るなる^{なり}。又^{また}十^{じゅう}餘^よ國^{こく}を^を經^へて^て海^{かい}岸^{がん}に^に達^{たつ}す。
竹^{ちく}斯^し國^{こく}自^{より}以^い東^{とう}は、皆^{みな}倭^わに^に附^ふ庸^{よう}(^{付^ふ属^{じく}})
す^す。朝鮮^{しんせん}半^{はん}島^{とう}を^を南^{なん}下^かす^るに^につ^つれ^れて、温^{あたた}か^かくな^なつ
て、日本^{にっぽん}国^{こく}は、も^もつと^と南^{みなみ}の^の海^{かい}中^{ちゅう}に^にあ^あり^りま^ますの
で、さ^さら^らに^に暖^{あたた}か^かく^く過^あじ^じ易^{やす}う^うご^ござ^ざい^いま^ます。
「そ^そん^んな^なこ^こと^とは^は知^しっ^てい^いる^る。あ^ある^る書^{しよ}物^{ぶつ}に、
倭^わの^の地^ちは^は温^{あたた}暖^な、冬^{ふゆ}夏^{なつ}生^{せい}菜^{さい}を^を食^くす。皆^{みな}徒^た跣^{せん}(^は
だ^だし^し)と^と記^しさ^され^れて^てい^いる^る。そ^その^の水^{みづ}に^にい^いて^ても^もそ^その
本^{ほん}に^には、日^{にっ}郡^{ぐん}(^{帯^{たい}方^{ほう}郡^{ぐん}})より^{より}女^{にょ}王^{おう}國^{こく}に^に至^{いた}る^る萬^{まん}
二^に千^{せん}餘^よ里^りと^と書^かい^いて^てあ^あつ^つた。倭^わ國^{こく}へ^へ赴^{おもむ}く^くの^のも^も難^{なん}儀^ぎな
もの^{もの}よ^よし^し。其^{その}言^{ごん}葉^{えつ}に^に口^{くち}を^を差^さし^し挟^{はさ}ま^ます。
小^お野^の妹^{いも}子^こは、あ^あえ^えて^て何^{なに}も^も言^いわ^わな^なか^かつ^つた。い
や、結^{けつ}構^{こう}な^なこ^こと^とと^とさ^さえ^え思^{おも}つ^つた。へ^へ案^{あん}内^{ない}す^する^る
小^お野^の妹^{いも}子^こは、客^{きやく}人^{じん}達^{だつ}を^を大^や倭^{まと}國^{こく}(^{九^く州^{しゅう}})の^の都^{みやこ}
の^ので^では^はな^なく^く先^まず^ず遠^{とほ}い^い東^{とう}方^{ほう}の^の大^や和^わ國^{こく}の^の
副^{ふく}都^とへ^へ連^つれ^れて^て行^いく^く手^て筈^{はつ}に^にな^なつ^つて^てい^いた^たの^のだ^だつ^つた。
裴^{はい}世^{せい}清^{せい}ら^ら十^{じゅう}三^{さん}人^{にん}、あ^あよ^よび^び小^お野^の妹^{いも}子^こら^らを^を乗^のせ
た^た船^{ふね}は、朝^{あさ}鮮^{せん}半^{はん}島^{とう}西^{せい}岸^{がん}を^を水^{すい}行^{こう}して^{して}竹^{ちく}島^{しよ}に^に至^{いた}つ^つた。
因^よみ^みに^に述^のべ^べる^ると^と下^{くだ}

たか
44 元 1355^P

住那也打子藏海寸
紀F491⁰

大カニ 1482^P
小カニ 641^P

3.933

高羊地圖54P
「珍島」

朝鮮の地図 (ok)
270 Km
5国 前文 15分

隋書卷75注3 參考点11
 天_時改行 改行 3939-2/2
 95行

竹島は朝鮮

釜山の南の絶景島か

半島東南端

一名牧島

とする説がある。
〔岩波文庫〕四三七〇、

岩波書店、七五頁、二三参照

かし、朝鮮半島の東南に位置する絶景島

あそ「地理的に合わないようだよ」

もしかしたら、朝鮮半島西南端近傍の島々

の
う
ち
の
ど
れ
か
一
つ
か
、
コ
竹な鳥た
凸ぼ
と
呼
ば
れ
て

11 た の で は な か ろ う か

南端の海に珍島という島がある。南人の参考になる、朝鮮半島の最西

な
お
、
口
珍
凹
は
口
夕
カ
凹
と
も
訓
め
る
。
ハ
漢

和辞典
L 小林信明
小学館
人珍
V
。 7
大字

典^り上^る田^た万^ふ年^{ねん}、講談社、
人^{ひと}珍^{めづ}、
参^ま照^{しょう}、

い
わ
ず
も
か
な
の
こ
と
な
か
ら
あ
え
て
お
し
え
る
と

次のように想像する。

● その昔、
珍鳥と呼ばれていたこの鳥は

倭国の勢力圏内に置かれた神功皇后の

御代以来、
日珍鳥
ある
いは
日竹鳥
と呼は

* 竹しの古形は「竹」である。(「廣辞苑」(竹)参照)

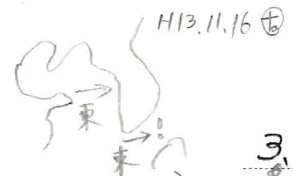
②
しかしその後、任那を討ち滅ぼした朝鮮半

明治562年
日本列島に

紀下180³行 紀下177⁶⁰⁸
562
46

新小(1)表(年表)
OK

3.934^P



その後の推古八年(六〇〇)推古十一年
(六〇三)頃任那国の再興が企図されたものの、ついに果たせなかつた。(推古紀八年是歲条。同九年三月五日条等参照。同十一年七月条には、遂に征討つことをせよとある)従つて倭人達(小野妹子ら日本人達)は、もはや普通に任那へ自由に立ち寄れる情況でなかつたに相違ない。造船技術や航海技術も進歩して、大濤をも一気に渡り切る自信があつたのであろう。ともあれ、山東半島から百濟へ(度)のと同様に、朝鮮半島西南端から、東の方角にあたる對馬も、くは壹岐嶋へ向かつて進路をとり、(度)つていったように推察される。もつとも、裴世清や小野妹子らを乗せた船が、隋の船なのか、日本の船なのかは、定かでないものの、隋の旗をなびかせ、隋の威信を誇示した豪華な隋の船だつたのであろうと思われろ。

かき留める 378P
かき留める 412P
③3931

①493P 3.935P
③3931

最新基本地図 南緯
①① 図参照
H13.11.16 4:20 水
「ところで」 ③3889-1/2
180km = 60km
電 対馬海流

西からの風に乗って、海流の流れに乗って、
船は真東に進んだ。はるか前方には、都斯麻國
(対馬)の山々が、細長く行く手をばむか
のように横たわっていた。
西北端(東松浦半島)の釜山から九州
北端の呼子あたりまでの直線距離は、約百
八十キロであり、こ水に対して、対馬
の南北方向の全長は、何と三令の一以上の
約七十キロもある。
天候の激変等、危急の際には、
眼前に横たわる対馬のどこかに、船を漕
ぎ寄せたらよいし
と考えられたのだろう。(第二十一章
「対馬国」の項参照)
とはいえ、船は都斯麻國(対馬)には「至
らなかつた。もうにも思わぬ。都斯麻國の南
端の沖を掠めただけなのかも知れない。
今、裴世清らは、都斯麻國を經、迥かた大
海の中に在った。
筆をとって書き留める裴世清の背後には、

不均等
対馬

凡三抄
H5.4.4(向)④
H11.10.2(主)

こと

3936^P

④3931^P同文

東して
④3931^P

④3931^P17
④3934^P14
④3933^P19
隋書倭44
一支國

米

西へ大きく傾いた太陽があった。
か。今日は、東方前方に見えるあります。一支國（壹岐）に船を着けて、宿をとる。こゝにいたる。存じます。L
「ふむ。そうするがよい」
「こうして船は、又東して一支國（壹岐）に至った。通り」
*先述の隋書倭国伝に「百濟を度り、行きて、竹島に至り、南に舳羅國を望み、都斯麻國を経、迥かに大海の中にある。又東して一支國に至り、云々」とある。又南して一支國に至り、と記す。水ともあれ。又南して一支國に至り、と記す。れていなり。ことが注目される。

齊州島

對馬

山田 周防 1181

山田 周防 1181
3931P

3937P

山田 周防 1181
3922-3/3
紀下190P

山田 周防 1181
紀下190P

山田 周防 1181
3928P以下推古紀16年参考

山田安榮は周防の音を秦王にうつしたとする

● 秦王國について、松下見林は嚴島とし

た。● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

● 秦王國は、一体何処に

3,938⁺

すあう 店 1181P
店印
はき 565P
木 小林 1109P
木 563P
わう 元 263P
王

書^かき^う字^うさ^うれて^いく^うち^ちい^いつ^つか^か秦^{しん}王^{わう}国^{こく}に^にな^なって^てし^しま^また^たの^のか^かも^も知^しれ^れな^ない^い

要 11 以下 一般に、その地を包含。

④ 3932P 257

④ 3932P
十餘国

3,939P-1/2

こと

なお、「其の人」とは、
へ裴世清が立ち寄った一支國（壹岐）・竹
斯國（筑紫）・秦王國等の國々の支配階級の
人々のことを指しているのであらう。✓
と、この物語では解いた。✓
・決して、（秦王國）
へ秦王國の人だけが華夏と同じである✓
という意味ではあるまい。✓
・また、「夷洲」は今の台湾のことであるか
ら、ここを疑っているのは正しい、という。
へ「岩波文庫」四三七〇、岩波書店、七五頁
注一〇参照）
旅はさらに続いた。幾つもの國々があつ
た。
開くところによると、
「竹斯國（筑紫國）より以東は、皆倭
に附庸（付属）している」と
いう。
・もしかしたら、この文は、
筑紫國も含め、筑紫國より以東は、

下

3,939⁰-²/₂

参考迄
3933⁰-¹/₂
凡記 379⁰
519⁰

と記されていゝ。

の國たりきし

肥前の國は、本、肥後の國と合せて一つ

米

頭、

と理解してゐたのであろう。
参考迄に述べると、肥前國風土記の冒

あり、筑紫國以東は皆曰倭に付属してい
へ対馬・壹岐・肥前・肥後地方は曰倭に
あり、筑紫國以東は皆曰倭に付属してい
と、夫意味なのかも知れない。
この当時の人々はまた、根強く、

倭へかつての邪馬台國。肥前・肥後地方に
付属してゐる
心の中で

ただ836 気雨2 3907 ことさらなまでに 3959

第11巻 3928

3794 608 600 7-25 8

3940^{P-1/2}

必ずみ 次

化下180^P

3937, 3942 499

3943 13年に合わせて7回と8

難波での出迎えの儀式

雄成は、裴世清らをも、日本国の都（つまり九州の

小墾田宮）へではなく、一と一、東へ東へと宋

内（ていつたの）だううや、客人は、その

副都（近畿の都）を訪ねなければならな

と考えら小ていたのかも知れない。

先述の（大）ように、開皇二十年（六〇〇）

ころ隋文帝が遣わした所司は、先ず東の日辺

日本国（近畿）の都へ行き、その後、

阿蘇山を越え、西の大倭国（九州）の都へ

赴いたように想察される（第七十二章 所司の倭国見聞）

世清の威厳をとりつくろった様子には、徒事

ならぬない気配があつた。

へ裴世清は、単なる親善の使節としてやつ

殊更なまでに

兩國家間の友好を深めるための

既述

14547(外)② おもく 2330 高句麗 387 3940-2/2
 148.12.30 ② 高句麗 387 3940-2/2
 1067 高句麗 1067 粉砕 1918 300両
 友人 ③ 395 ④ 397 ⑤ 399 ⑥ 399 ⑦ 399 ⑧ 399 ⑨ 399 ⑩ 399
 2人 848 セン 1243 魂胆 世情 一に、うとい

かよかうう

てきたわけではあるまい。必ずや、この東
 海の我国に、高句麗の背後を襲わせようとい
 ているのであろう。✓
 世情に敏感な人々の目には、そんな隋の魂胆
 が、ありありと見て取れた。✓
 隋の皇帝（煬帝）は、
 強引にも我国に高句麗出兵を押しつけるつ
 もりなのであろう。✓ への
 と察せられた。
 尚、恐らく聖徳太子は、
 決してその手に乗るはならない。好ましい関係に
 ある盟友国高句麗を裏切り、自ら猛猛しい
 大國隋を身近かに招き寄せるような愚行など
 となることがあろうともすべからず。では隋の天子の思惑
 を粉砕するには、どうしたらよいだろうか。✓
 と熟考されたに違いない。第七十四章 高句麗国・隋国
 ・そして、思案のすえ、
 「隋国の使者裴世清を、丁重に東国へ案内
 し、その野望を完全に打ち砕いた後、
 日本国の都（九州の小墾田宮）へ連れ来てゆく

3956
608年 隋書 69P
3941P

3922P-3/3
3919P
1133P

3940P-1/2 平八軒

と胸の内に企図されたものと思われ(後述)

また、たものと思われ(後述)

ハすくなくとも、裴世清らがこの東海の島

の何処かに居る期間中は、高句麗

への出兵など考えなくてよい

とも思慮されたものではなからうか

追って述べるように、裴世清は、遼か東の大和国へ連

れてゆかれた後、散々なめにあ

うことになる。

しかしながら、裴世清は、我が身に降り懸るそんな

など知るよりも、八年前(つまり倭国と日辺日

本国を統合する以前)の開皇二十年(六〇〇)ころ隋

文帝が遣わした所司の記録を信じて疑わす

東海の島全土を取り仕切っている倭王

多利思比孤に拜謁する為、瀬戸内海を東の

方へと漕ぎ降っていったの

方へと漕ぎ降っていったの

*

「ようきやくした」とか「湯い」といふわけない。

45.48 (木)

3922-3/3
3923
3.943P

3960P

紀下1903号 304号

改行

改行

改行

新キ

こと

HV

したものとのかという。か、数百人を従え、儀仗
を設け、鼓角を鳴らしながらやうて来て出迎えた。
この歓迎は、隋からの使者達を満足させるに
充分なものであった。後述の隋書倭国伝参照。
・こうして、遠来の客人達は、難波に新しく
造られた隋館へと、案内されていった。
・ようこそ御越し下さいました。私共三名が
掌客として、貴方様かたのお世話をさせてい
ただくとはなりません。どうぞ何なりと御
用命下さい。

掌客(接待係)に任じられた三人は打ち揃
って挨拶した。

中臣宮地連烏摩呂・大河内直糠手・船史王
平が、隋からの賓客十三人の掌客とされたの
だった。(紀)

推古十六年(608)六月十五日に畿内へ到着した後の裴

世清らの動向を、予め手短かに見ておこう。

通事(通)海石榴市が非常に重要である。朝命を帯びて

急ぎ来朝した裴世清らは、八月十二日迄の二ヶ月間

難波館でのんびり、国王(推古天皇)に会

える日を待っていた。裴世清らは、

13年 14年

儀式用の武器

「めでたう」かまら

③3963¹ すで ^{ニウ33(カウラウ)} 郊^{シヤウ} 勞^{ラウ} ③3976¹ 月^{グヱツ} 後^ゴ
 既^{スデ} 1198¹ 郊^{シヤウ} 勞^{ラウ} ③3962¹ ③3942¹ 2049¹
 ③3944¹ 紀^キ 下^カ 190¹ 紀^キ 下^カ 190¹ 紀^キ 下^カ 190¹ 紀^キ 下^カ 190¹
 天^{テン} 下^カ 190¹ 紀^キ 下^カ 190¹ 紀^キ 下^カ 190¹ 紀^キ 下^カ 190¹
 後^ゴ 10日 隋^シ 書^{シヤウ} 倭^{ヤマト} 國^{クニ} 伝^{デン} ③3942¹ 2049¹

推古十六年(六〇八)六月十
 五日に難波へ着き、それから十日後に大和国
 を訪れて聖徳太子に拝謁し、その後日本国の
 都(九州の都)へと向かい、八月三日
 に京へ入り、八月十二日に朝廷へ召された
 のであらうと想察される。
 記述の微妙な違いについて、見てみよう。
 隋書倭国伝には、こう記されている。
 又東して秦王国に至る。又十餘國
 を経て海岸に達す。竹斯國より以東は、皆な
 倭に附庸す。倭王、小徳阿輩臺を遣わし、
 百人を従え、儀仗を設け、鼓角を鳴らして来
 り迎へしむ。後十日、又大禮可多毗を遣わし、
 二百餘騎を従え、郊勞せしむ。既に彼の都に至
 り、其の王、清と相見え、大いに悦んで曰く、
 日郊勞とは、客を郊外に出迎えて
 郊勞する」という意味である。そして他国から来る
 客の入京の際に、郊外まで出迎えてねぎらう

ニ

解部次頁16

紀下190'4

3,945P

紀下190'5
紀上290'13
申3962

改行

ことは、礼式の一つであつたという。(漢和辞典)

・つらなり
小林信明、小学館、郊外・郊外

へ裴世清らが難波津に達して十日後、礼を

重んじ大禮可多毗はぐ、二百餘騎を従

都の郊外まで出迎え慰勞したのだろう

と思われ。えて副都(大和国春日あたり)に置かれて

・なお、「郊勞せしむ」と「既に彼の都に至

る」との間、―――本来は、何か記されて

いたのであろう、と想像される。(後述)

②一方、日本書紀に注記すると、大略、

次のようにならうか。

「六月十五日、客等を江口に迎え、新

館に安置しめたる。それから一ヶ月半後の

八月三日、飾騎七十五匹を遣わし、客

を海石榴市(景行紀十二年十月条によつて、

久住山南麓あたりに海石榴市と云う所があ

つたことか分る)の術に迎えた。是の日、

礼意を表わす作法

小林 982上

H5.4.9(金)
H11.10.2(土)

3945 3946P 6月15日 3945

(こ)

マカン527
奏ス

3963 19年へ

190
5斤

3963
19年

客等は京(京都府)と行ったような、大きな意味での京の地、肥後国を指すのであろう)に入った。八月十二日に、客を朝廷に召して、使の旨を奏上しめたと。なお、裴世清らを郊外に迎えた時の馬の数について、
①隋書倭国伝には、「二百餘騎」
②日本書紀には、「七十五匹」とあり、大きく異なっている。
とある。一「聖徳太子」坂本太郎、吉川弘文館、一九九頁、末行参照) 六月十五日に
異論はあろうが、この物語では、
(1) 裴世清が難波へ着いて十日後には、二百餘騎を従えて出迎えた。
(2) また、八月三日には、飾馬七十五匹を遣わし、久住山南麓の海石と解釈して以下「書主進め」にいで

米

③ 3982-1/2 875
③ 3965
④ 797
④ 1682 ③ 3965-1/2 16h

金屋 紀下9月28

3,947^P

大和3道 聖徳太子 田村A澄4

③ 3949 山田の道

倭王と為すを思む

推古十六年(六〇八)六月十五日に難波津へ着いた裴世清らは、新しい館においで旅の疲れを癒した。

客入達は、難波の隋館を後にして、奈良盆地の東端に位置する日海石榴市(奈良県桜井市金屋)に到った。

あるいは、裴世清らは、海石榴市の術(分)

目(の)において、大禮可多毗(額田部)かとい

う(の)加率(ひき)いる二百餘騎に迎えられ、

から(の)南へではなく、北へ折れ曲り、真直

ぐ都へと進んでいった(の)と(の)う(の)か。

な(の)お、海石榴市(奈良県桜井市金屋)一三

輪(の)柳本(の)石上(の)奈良を結び日上(の)道(の)と呼

は(の)れる道の最北端に、春日がある。

・すでにこの当時、日上(の)道(の)の《元》と

なる大道が存在していたのかも知れない。

二百餘騎が続く盛大な行列は、海石榴市の

行列

小治部 3965 4231
9368

55分の

こと

3,948^P-1/3

紀下/91^P

高市郡 明石村 飛鳥
3835 1/2 3965
1557 3808

1/4747

上つ道 田村内 登り
逢人 前 14 行 前 10 行

察さぬ。

*

この夏 3 行

術(分小目)から、この日上つ道を真直北
上し、春日の地の宮、率川宮へ、威風堂々
辺を払って進んでいったのであろう。
先述のように、推古天皇の曰小墾田宮は奈良
県高市郡飛鳥の地にあったろう、といわれ
いる。『日本書紀』日本古典文学大系、岩
波書店、一八〇頁注三参照。の項において既述
だが、もしもそうだとすれば、推古紀十六年
八月三日条および八月十二日条によると、
「裴世清らは、難波から、奈良盆地の東の
端に位置する海石榴市(奈良県桜井市金屋)
まで行き、飾馬七十五匹を従えた額田部連比
羅夫に迎えられ、その後何故か引き返
して飛鳥の曰小墾田宮へ入った」
ということになる。
とはいえる
難波から、海石榴市へ行き過ぎて後、再
び天香久山の方へ逆戻りして都に入った。
とは考えにくい。
推古朝の曰小墾田宮は、大和国には無く
て、実は西方の九州に有ったのであろうと推
察さぬ。

●ちとも参考迄に述べると、
の奈良時代ころの小治田宮は、奈良県明日香村雷に
あつたろうといわれている。
●続日本紀、淳仁天皇の天平宝字四年(七六
〇)八月条に、
十四日、播磨国の備前ほりまの へんの五
百斛ひゃくこく、備中国の五百斛びんちゅうの びん、讃岐国の一千斛さぬきの せんを
以て小治田宮に貯ふ。十八日、小治田宮
に幸す。云々

とある。

●そして、奈良時代の離宮・小治田宮跡
であろうと推定されてきた奈良県明日香村雷
(天香山の南約一きキロ)の「雷丘東方遺跡」
で、奈良、平安時代の倉庫跡二棟分が出土し
、規模が大きいことなどから、奈良国立文
化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部は、この
一帯が淳仁天皇の小治田宮だったと断定した。
(「朝日新聞」平成五年十二月二十二日付参
照)

3,948^P-3/3

④ 3947 9所

なお、^{いかすちのおか}雷丘^{ちゅうきゅう}は、^{ふいけらきう}藤原京の東南隅に位置^{いぢち}
してあり、^{ちゅうもく}注目される。^{（五万分の一地図）}
長安から平城へ江上波夫池、平八社、二
七頁第三図参照）
^{すなわち}つまり^{はな}奈良時代の^を小治田宮^{はりだのみや}は下^つ海石榴^{ばきち}市^し
(奈良県桜井市金屋)の西南^トにある。
にあつた、ということになる。

*

紀下192 3行
5行

同
3976-1/4末
紀下192 3行
3,949P

みかど 紀下173P
朝廷 紀下190末3行
大仏殿の北ありが 水につかる所

道の道 大神神社37P
2235P

孤(だと思ひ込んで)裴世清は、自ら書を
の(人)に云はく(参考)
目(前)に御座す人物
さて(聖徳太子が)日(倭王)に(多利思比)
た(が)も知れない(推古紀十六年八月十二日条)
て(頭)に着し、また(服)の色は、皆(冠)の色を用ひ
な(お)は(是)の時、
皇(子)・諸(王)・諸(臣)は悉に(金)の(髪)花を以
この(東)国(の)遠(の)朝(廷)に(客)人(を)召して、使(の)旨
を(述)べ(せ)に(な)つた(の)であらう。
庭(の)日(幸)川(宮)に(あ)つた(ら)うか(開化紀元年十月条参考)
万(機)を(悉)く(委)ね(ら)れ(て)い(る)聖(徳)太(子)は、
な(っ)て(い)た。
その(道)の(最)北(端)、春(日)の(と)こ(ろ)に、東(の)朝
つ(道)の(山)の(道)の(左)手(に)は(大)理(原)
か(広)が(っ)て(お)り、右(手)に(は)緑(濃)い(山)々(が)連(ら)
な(っ)て(い)た。
奈(良)盆(地)東(端)を(北)上(す)る(大)道(後(代)の(上)り)
米

紀下190
末行

コフヨ ケー20 201

3976-1/4
2/4

648

紀上232P

倭皇 ③3982²-2/2
6~79

3950

P₂₀₀!

続きは ③3956¹

④4242¹

この続きは ③3956¹ 6行へ

紀下190¹
注21

紀下190¹末行

改行

持ち、使の旨を言上した。

「皇帝^{ミカド}倭王^{ヤマト}（倭皇^{ヤマト}）を問ふ。云々」

とあった。（推古紀十六年八月十日条。他参照。後述）

「聞主終えた聖徳太子は、裴世清からそ

「この書は、倭王に宛てたものとなつてい

るか、我国に倭王はいないし

と仰せられた。

裴世清は、あつけにとられ、まじまじと

多利思比孤（聖徳太子）を見つめた。

の国書を受け取り、入念に一字一句を
確認した後、

なおよやあつて、
大坂都さ小たに相違ない。

（*）

主は「かうかい」さん、584" 本居直也。

45.3.26 金(土)

→ 改行

聖徳太子 坂本太郎 122^p

3,951

#上(下)138^p

宇治谷(下) 93

紀F191^P

紀下191

42770K-OK

すゝ、1983年

隋煬帝(4) 3899 3斤

參差近 39/2' 19'

因みに推古紀十六年（六〇八）八月十二日条
 を見てみると、隋煬帝からの書には、
 「皇帝、倭王を問ふ。……皇、海表に
 介り居て、民庶を撫で寧みし境の内安楽にして
 風俗融り和ひ、深き氣至れる誠ありて、遠く朝貢ふことを脩つていふこと
 あり。皇帝から倭皇に御挨拶申し上げる。……皇
 倭王は、海表（海外）に介り居て、民庶
 さいつくくみ、国内は安泰にして、人心は
 融和し、誠意をつくりてゆざはるばると
 朝貢してきたことを知って、その美しい真心
 を、自分は嬉しく思う。云々」
 と述べられていたという。
 ・もっとも、「倭皇を問ふ」および「皇、海
 表に介り居て」と記されている二回の「皇」の字は
 中国国書の例からいえば「元は王であつた
 う」というのが古来の説であり、今もその説
 を支持する人は多い。
 ・ただ、どこで皇に改めたかという点につ
 いては人によつて違つてゐる。
 ・「本居宣長著」は、「日本書紀」に載せる際
 に改めたのだらうという下

知りぬ云々

年表 推古16年 797 1/2 版 冊 201 13人 797 経籍後伝記 坂本太郎 104 詳し
 まう 紀下192 白す 10行 坂本太郎 123 168 201 3982 3952 3923 3923 経籍 大カワ 1724 小林 254 (経書)
 紀下192 3955 4242 経籍 天つき 改行

(2) その他日本書紀の原文は「王」であつたが、後世伝字に携つた者が
 改めて「皇」としたのであろうとする説等がある

本書紀「(F) 日本古典文学大系、岩波書店、一
 九一頁、注二一参照」

ともあれ、隋煬帝からの国書には、
 天皇「や」日本国王「でなく、日倭王」と

記載されていたようである。善隣国宝記の中に載せられている

経籍後伝記には「其の意気の高遠なるを怪しみ、裴世清ら十
 三人を遣はして、因高(小野妹子)を送り

来りて国風を觀しむ」とあり、この文に続けて「其の書に曰く、皇帝、倭王を問ふ。聖
 太子、甚だその天子の号を黜け、倭王と爲す

を悪みて、その使を賞せず。仍りて報書して、
 曰く、東天皇、西皇帝に白す。云云」返事の手紙

と記されている。(「聖徳太子」坂本太郎、
 吉川弘文館、一二三頁。推古紀十六年九月十

一日条参照)

恐らく、隋からの国書中に「倭王」と記さ

瑞彦 周鳳 元年 1279
相国寺 1091
3,953 P 新 1279 上
1279 P

二と

水でいたので、聖徳太子は、

「日本国の天子の称号である日天皇」

「くは日本国王」を黜け、日倭王と為すを患んで、その使者裴世清らを賞でうけな

かった。ということなのだろうか。

な

（一）善隣国宝記に史書三卷は、相国寺の僧周鳳撰。日本と朝鮮・中国との通交關係を述べ

明の憲宗の時代までを記録。わか国最初の外交書である。一四七〇年（室町時代中期）の文明二年

成る。（「玄辞苑」へ善隣国宝記参照）

（二）善隣国宝記に載せられた元永元年（一一八八）四月二十五日中原朝臣師安ら五人の

引いた文中の「経籍後伝記」と題する書の中に、小野妹子を隋に遣わした理由や、煬帝の

それに対応した有様など、他書に見えないこ

とが記されている。（「聖徳太子」坂本太郎

吉川弘文館、一〇四頁参照）

という。

＊

コケヨ ケー20 20×20

652

日本書紀 489

二と

二と

らいちよう
来朝 二の頁3行
こと という

3.954P

こと 天のき改行
なす 揚 二の頁1392P
こと 以前に 二の頁 来2行
3952P

それは、
は極めて重要である。
隋煬帝の使者裴世清が国書を携えて来朝
する少し前に、我国に大きな変革があった。
ことを、如実に示しているといえよう。
そも、推古十一年（六〇八）当時にお
いても、従来通り「倭国」という国号を使
用し、また「倭王」という称号を用いていた
のであれば、隋煬帝からの国書に「倭
王」と書かれていたにせよ、それに対して
聖徳太子が悪む理由など、全く無いのである。
――
隋からの国書中に、「倭国の王」とのこと
が「倭王」と記されていたからといって、
聖徳太子が、その呼称を悪んだばかり
でなく、その使者をも賞でなかった。
――
というのであれば、理解に苦む筋違いと
いうべきであろう。
――
といったことから推測すれば、隋煬帝の使者
が国書を携えて渡来する以前に、
① 我国の対外的な国号は、「倭国」から「日

コフヨ 二の頁4行
こと

二の頁5行 653

こと

紀下192^P 3952^P 16^行 ←
 東天皇西皇 3955^P
 紀下192^P 坂本太郎 123^P
 3952^P 16^行 3952^P

本國にへ、

② また、我國の天子の称号は、曰倭王にから

曰天皇にへ、

と改められ小たように思わゆる。ヤ曰日本国王

即ち、隋煬帝からの国書に「曰天皇に」でな

く曰倭王に」と記されていたからこそ聖徳太子は

「その天子の号（天皇という称号）を黜け

倭王と為す」日本国王

を悪み、またその使をも賞でか、仍りて裴

世清らの帰国の際、

① 東天皇、西皇帝に白す。云々（経籍後伝記）

② 東の天皇、敬みて西の皇帝に白す。云々

といった報書も小野妹子に持たせ、隋へ遣わし

小たのであうと解さる。

み行目の上端を
1字分アゲル

*

（推古紀十六年九月十一日条）